

中間・事後評価一覧表

プロジェクト名 (研究期間)		プロジェクトリーダー (所属)	評価 時期	事務局評価コメント(参考)	評価結果
1	「橋面より実施する簡易な橋梁点検システムに関する研究」 (H26～H28)	福井大学大学院 工学研究科 准教授 磯 雅人	事後	研究目標である回転式打撃装置による被りコンクリートの浮き・剥離等の判定手法、並びに装置に搭載したHDカメラ等により取得された静止画像から損傷図を高精度に作成する手法が開発され、さらには実橋梁を用いた本システムの妥当性の検証と評価が確認できたことは、十分な成果であったと判断する。また橋梁点検における支援技術として作業負担の軽減やコスト縮減が見込まれることから、実用化に向けて十分な研究成果であったと評価する。	A
2	「FRP製簡易展開式橋梁検査足場の開発に関する研究」 (H26～H28)	京都大学大学院 工学研究科 教授 杉浦 邦征	事後	プロジェクト計画上、研究報告のための資料提出の遅れが生じるなど計画どおりではない部分も一部あったものの、従来の橋梁点検において橋梁管理者が抱えている近接目視の課題に対し、効率的かつ安価な検査足場の提案がなされ、実績調査、各種法規の確認及び力学特性の把握などの基礎的な整理から、室内実験及びフィールド実験などの実証を重ねており、その研究成果は新規性、実現可能性の面からも十分に評価できるものと判断される。	A
3	「舗装アセットマネジメント高度化に関する研究」 (H26～H28)	京都大学大学院 工学研究科 准教授 松島 格也	事後	中長期的なライフサイクルコストの最小化に資する道路舗装維持更新戦略の立案を目指す中で、統合的なデータベースシステムとそれを活用した舗装管理マネジメントシステムが構築され、さらには官側から提示した点検要領に基づく舗装状態の判定区分基準に対して、プロジェクトで実施した分析をもとに改良版の提示がなされたことは、研究成果として十分に目標が達成されたと判断する。また研究成果は、研究対象であった道路舗装だけでなく橋梁など他のインフラ施設に対しても援用が可能であり汎用性が高いものであることから、活用性の高い十分な研究成果であったと評価する。	A
4	「海岸近接部において耐候性鋼材(無塗装仕様)を使用する橋梁の環境計測技術に関する研究」 (H28～H30)	神戸大学大学院 工学研究科 准教授 橋本 国太郎	中間	研究項目である腐食環境評価法や腐食状態評価法の開発において、腐食量と濡れ時間との関係、温湿度から濡れ時間を予測する手法の検討やACMセンサー等による計測結果により、腐食量と付着塩分量との関係が明らかにされるなど、初年度としての目標が達成されたと判断する。また、平成29年度研究に向けて、曝露試験片等の実橋梁への設置の他、簡易腐食モニタリング装置の提案が出されたことなど、プロジェクト研究目標への確実な進捗となっているため、今後、具体的な装置の開発や評価手法の構築が十分に期待される。	B
5	「事前道路通行規制区間の解除のあり方に関する研究」 (H28～H30)	神戸市立工業高等専門学校 都市 工学科 教授 鳥居 宣之	中間	時間的及び空間的な2つの解除基準の提案に向けて、地整内フィールド事務所の他、複数の自治体、高速道路事業者、鉄道事業者へのヒアリングの実施、さらには砂防分野の取り組みについても整理されるなど、通行規制・解除基準に関して十分な調査が実施されている。またプロジェクトを進めるにあたり、解除基準の他、降雨特性評価の検討も含めた3つのWGを立ち上げ、定期的な会議開催による情報共有に努めるなど研究体制が充実していた。これら調査・取組体制により、本研究目標における現状把握及び課題抽出が当初計画どおり整理されていることなど、今後十分な研究成果が期待できる。	A
6	「ETC2.0プローブ情報の利活用の提案と効果分析に関する研究」 (H28～H30)	東京都市大学 工学部 都市工学科 准教授 今井 龍一	中間	ETC2.0プローブ情報の基本特性を網羅的かつ徹底的に分析したことで、平成28年度の研究目標であった交通流動の総量把握に向けた起終点判別手法及び走行経路保管手法の仮説が取りまとめられた。また研究を遂行するにあたって、国総研での研究手法をふまえることや協議を重ねることで緊密な連携が図られていることで、研究成果がより精度の高いものとなっている。今後、研究を継続することで、最終目的である空間的にシームレスな交通流動の常時把握、交通流動の時間変動把握などに向けた研究成果が十分に期待される。	A
7	「道路ネットワークの整備がもたらす広範なストック効果の計量化手法に関する研究」 (H28～H30)	京都大学防災研究所 総合防災研 究部門 教授 多々納 裕一	中間	平成28年度の成果として、社会基盤整備がもたらす立地促進効果に関する実証分析の可能性や、災害時のリダンダンシー向上効果の試算を通じた交通ネットワーク・SCGEモデルの適用可能性が示されたことは、当初の目標を十分に満足されるものであった。また、PJリーダー所属の大学外における研究者をPJチームに多数加えるなど、研究体制も十分であった。今後、ストック効果の計量化において、実証分析に向けた対象地域の選定及びデータ整備等を進めること、リダンダンシー向上効果の計量化において、考慮できていない効果に関しても評価に盛り込むことで、さらに十分な研究成果が期待される。	A
8	「道路事業における3次元データの利活用に関する研究」 (H28～H30)	大阪経済大学 情報社会学部 准教授 中村 健二	中間	施工管理データを用いた道路工事完成図書の作成支援技術を検討した中で、施工管理データが計測している6地物を対象に施工管理データと道路工事完成図書との関連付け手法を考案したうえ、その有用性について管内工事の完成図書を用いて検証確認がなされるなど、研究目的である3次元情報を維持管理フェーズに利用することの基礎技術が構築された。引き続き道路工事完成図書と3次元情報との関連付け手法の高度化を進めることとなり、さらに十分な研究成果が期待できる。	A
9	「3次元データ活用に関する研究」 (H28～H29)	立命館大学 理工学部 都市シス テム工学科 教授 小林 泰三	中間	モデル盛土を使った実証実験において、UAV空撮による変状差分図の作成により、盛土の陥没や隆起が発生する前の微少な沈下やはらみ出しなどの把握が実証されたとともに、サンプリングモアレ法による高精度な変状監視が実証された。また盛土内部の情報化においては、従来の盛土品質管理手法に代替する3次元点群の表示手法を提案されるなど、実証結果が伴っており実現性が高く評価できる。さらには、これらの提案において、データの軽量化や試験時間短縮などの課題が的確に抽出されていることで、今後その対応策も含めた研究成果が期待される。	A
10	「橋梁の耐久性向上に資する排水構造と排水設備に関する技術標準の策定」 (H28～H30)	大阪大学大学院 工学研究科 教授 奈良 敬	中間	プロジェクト計画上、研究報告のための資料提出の遅れが生じるなど計画どおりではない部分も一部あったものの、PJの初年度として、損傷データの収集・分析結果が報告された他、浅水川橋でのモニタリング手法案について取りまとめられるなどの成果が確認された。また腐食環境と腐食負荷に関する検討において、腐食箇所への影響度の整理や腐食状況の評価表の提案及び評価表の試行などによる検証がなされたことから、一定の進捗が図られたと評価する。	B